

1.3 たった一つの問い「子どもたちの未来に何を残すか？」

(1) 幼稚園・小学校・中学校単（単独校）でも「できる」新基準

非認知能力の育成は、学校規模にかかわらず全ての教師が実践可能です。本新基準は、日常の学びや活動を通じて挑戦力・協働力・創造性・コミュニケーションを具体的に育成する方法を示し、単独校でも導入可能な教育指針となる。子どもたちの未来に残すべきは、知識だけでなく、自ら課題に向き合い困難を乗り越える力と、多様な他者と協働しながら社会を切り拓く心の力のことです。

① 幼稚園（単独校）

幼児期の教育では、遊びや活動を通して自己肯定感・他者信頼・セルフコントロール・レジリエンスを育み、子どもたちが未来を切り拓く心の力を確実に育てることが新基準の核心となります。

ア 自由遊びでのグループ課題（自己肯定感）

ねらい：子どもが自ら考え、工夫して達成体験を得ることで自己肯定感を育む。
方法：粘土やブロック遊びで共同制作を行い、挑戦や成功体験を観察・記録し成長を可視化する。

イ 絵本読み聞かせ後の振り返り会（他者信頼）

ねらい：仲間の考えや意見を受け入れ、共感や協力を通して他者信頼を育む。
方法：読み聞かせ後、感想や気づきをペアで話し合い、互いの意見を尊重する態度や関わりの過程を記録し評価する。

ウ 順番やルールを守る遊び（セルフコントロール）

ねらい：自分の行動を抑制し、ルールを守る力を育む。
方法：かるたやじゃんけん列車などのルール遊びを通じて、順番や約束を守る様子を観察・記録し評価する。

エ 挑戦ゲームの振り返り（レジリエンス向上）

ねらい：失敗や困難に直面しても立ち直る力（レジリエンス）を育む。
方法：簡単な運動や課題に挑戦後、達成できなかった経験を振り返り、改善策や次への挑戦意欲を言語化させて評価する。

② 小学校（単独校）

授業や学級活動において、子どもたちが課題に挑戦し工夫する過程を重視します。特に、メタ認知・共感性・規範意識・社会的レジリエンスを育み、学習や生活の場面で非認知能力を発揮する力に着目していきます。

ア 学習振り返りポートフォリオ（メタ認知）

ねらい：自分の学びを客観的に振り返り、理解度や課題を自己評価できる力を育む。

方 法：授業後に学習内容や工夫した点を記録し、自分の思考過程を分析・整理して自己評価する。

イ ペア読書・意見交換（共感性）

ねらい：相手の考えや感情に共感し、自分の意見と照らし合わせる力を育成する。
方 法：ペアで読書後、感想や気づきを話し合い、相手の意見を尊重しつつ自分の考えを表現させる。

ウ ルール守りゲーム（規範意識）

ねらい：社会のルールや約束を理解し、適切に行動する力を育む。
方 法：体育や教室でのルールゲームを通して順番や約束を守る態度を観察・記録し、適切な行動を評価する。

エ グループ課題での達成振り返り（社会的レジリエンス）

ねらい：困難や失敗に直面しても仲間と協力し立ち直る力を育む。
方 法：グループで課題に挑戦後、達成できなかった経験を振り返り、改善策や次への挑戦意欲を言語化させて評価する。

③ 中学校（単独校）

中学校教育では、より高度な課題設定やグループ活動を通じて、意欲・創造性・協働性・コミュニケーション能力など非認知能力を育むことが重要です。挑戦や協力の過程を可視化し、学習・生活全般で活用できる力に着目していきます。

ア 自主課題チャレンジ（意欲）

ねらい：自ら目標を設定し、計画的に取り組む意欲と持続力を育成する。
方 法：授業や課外活動で自分が挑戦したい課題を選び、進捗や工夫を記録し、達成状況を自己評価させる。

イ 創造プロジェクト（創造性）

ねらい：課題に対して独自の発想や方法を考え、問題解決に応用する創造性を育む。
方 法：自由テーマでグループまたは個人で作品や企画を制作・発表し、工夫の過程や成果を観察・評価する。

ウ チーム課題解決（協働性）

ねらい：役割分担や協力を通じて目標達成をめざす協働力を育成する。
方 法：グループで課題解決に挑戦し、話し合いや作業分担の過程を記録し、協働の質を評価する。

エ ディベート・発表活動（コミュニケーション）

ねらい：論理的に意見を伝え、相手の意見を受け止めるコミュニケーション力を育む。
方 法：テーマに沿ったディベートやプレゼンテーションを実施し、発表・質問・応答の過程を観察・評価する。